

立教大学理学部創立 75 周年感謝礼拝講話

理学部長 花井 亮

学部長としてお話しするにあたり、私には、25 年前の理学部創立 50 周年の感謝礼拝が思い出されます。当時の理学部長は、いまは亡き高田健夫先生でした。高田先生を知る者として、私は、いま、ここに立ち、万感、胸に迫るものがあります。

25 年前、理学部は、施設の整備と教学条件の変更をセットで受け入れました。高田先生をはじめとする先輩方の苦渋の決断であります。

その結果、2001 年に 13 号館が建ち、4 号館はリノベーションされました。そして、私立大学に対する大型の補助金を何度も受け、研究の高度化をなしとげました。現在、素晴らしい研究業績をもった方たちを理学部の教員として迎えていますが、これは、施設や設備の充実なしには、できなかったことです。

教育面では、2002 年に生命理学コースが学科になりました。2005 年から豊島区と連携してサイエンスコミュニケーションに取り組み、2010 年からは、理学部共通教育のカリキュラムとして、サイエンスコミュニケーション、キャリア教育、科学の歴史、研究倫理といった科学と人間の関係を学ぶ科目を展開するなど、高度な教育を実践しているのです。

25 年前の感謝礼拝での高田先生の言葉の一節に、こうありました。

「本学部が個性的で特色ある教育・研究を実践し、これを通じて社会に寄与し、高い評価を受けるにいたったことは、大学人として誇ってよいことと思う。と同時に、ここにいたるまでの先人たちの計り知れない苦労と努力が偲ばれ、心から敬意を表さずにはいられない。」

私は、いま、全く同じ想いを抱き、先輩や同僚の先生方に敬意を表します。

そして、これは、学生、保護者、卒業生、立教学院の教職員、地域住民など、大勢の方々の参加、協力や支援なしには、実現しえなかったのです。ここに感謝を表します。

その一方で、この 25 年間には、2011 年の東日本大震災、2020 年からの新型コロナウイルス感染症という、大変な災禍がありました。それ以外にも、大きな地震が頻繁に起こっていますし、毎年のように起こる水害や酷暑には、気候変化の進行を実感せざるを得ません。以前とは違った厳しい時代に入ってしまったのです。

立教大学理学部は、この厳しい時代を生きる人類にサイエンスで貢献する人材を育成しなければなりません。

現在、理学部の建築計画が進んでいます。既に更地になっているミッチェル館の敷地に新しい建物ができて、数学科と生命理学科が引っ越します。13 号館から生命理学科が抜けた後には、物理学科と化学科が引っ越し、4 号館に残る研究室のリノベーションが行われます。再び、施設の整備が行われ、研究をさらに高度化できるのです。

2026 年には、池袋キャンパスに環境学部が設置されます。環境学部は「科学を重視した文理融合のリベラルアーツ教育」を標榜しており、分野としては理学部の隣りということになります。つまり、理学部と環境学部は、一緒に、立教のサイエンスに貢献していくのです。また、環境学部の存在は、近年の AI の進展とともに、理学部の教育の高度化を促す力になることでしょう。

私たち理学部の教職員は、この好機を逃すことなく、理学部に関わるすべての人々と一緒になって、教育と研究の高度化を進め、この厳しい時代を生きる人類にサイエンスで貢献する人材、様々な分野で人類の将来を担う人材を育てていきましょう。

そして、理学部創立 100 周年において、再び、「大学人として誇ってよい」と言える実践のできたことを、ここで感謝しようではありませんか。

以上をもって、私のお話しといたします。ありがとうございました。

(2024 年 11 月 30 日、立教学院諸聖徒礼拝堂)